

231-pm03

初年次における学習記録継続率向上のための取り組みと学業成績との関連

○武本 眞清¹, 木藤 聡一¹, 宮崎 淳¹, 竹井 巖¹, 山崎 眞津美¹, 内手 昇¹,
倉島 由紀子¹, 畑 友佳子¹, 中越 元子¹ (北陸大薬)

【目的】北陸大学薬学部の初年次教育において、2016年度より始めた学習記録の取り組みが、学生の学業成績ならびに進級率を予測する材料となることを昨年の本会で報告した。学習記録は、毎日の正課外学習の科目と時間を study record (SR) シートに記入して、毎週提出するというものである。学生の主体性を尊重し、SR シートの提出自体を任意としているため、継続率の向上が課題である。今回、学習記録の継続率を向上させるための枠組みを構築し、改めて3年間を振り返って学業成績との関連を解析したので報告する。

【方法】継続率の向上を目的として、2016年度から段階的に加えてきた変更点は、1) 学習記録の継続率と成績との相関の開示、2) 個々人の集計記録のフィードバック、3) SR シートの内容改訂、4) 北陸大学初年次 SEED プログラム科目 (薬学入門 I、基礎ゼミ I) との連携、の4点である。SR シートの提出率2分の1を cut-off として、全15回中8回以上提出した A 群と、7回以下の提出に留まった B 群とに分け、各群の定期試験成績を比較した。

【結果と考察】過去2年間とも、A 群と B 群はおよそ半々に留まっていたのに対して、2018年度は、A 群 74% (82名)、B 群 26% (29名) と、顕著に継続率が上昇した。次に、入学直後のプレイスメントテスト I で成績下位 (得点率 50%未満) であった学生を対象として、A 群-B 群間ならびに年度毎の A 群間で、1年次前期の GPA 分布を比較した。その結果、過去2年間同様、2018年度も A 群は B 群に対して有意に高い GPA 分布を示した。一方、年度間での A 群の GPA 分布に有意差はなかったことから、成績との相関を維持したまま、学習記録の継続率向上を果たすことができたと考えられる。